

高等学校 保健体育

「ダンス」のより良い授業内容を探る
—男性教員も積極的に学べる研修を通して—

高校教育課 指導主事 坂上 佳苗

要 旨

高等学校における「ダンス」の授業を実施する上で、教員の授業に関するアンケートを踏まえながら、現状と課題を把握し、指導者の性別・年齢・経験の有無を問わずに展開できる授業内容や指導法を導くための研修について考察するものである。

キーワード：高等学校 現代的なリズムのダンス 男性教員 実技・指導法研修 学びの体験

I 主題設定の理由

平成11年の学習指導要領改訂により、保健体育科の目標については、「心と体を一体としてとらえること」を重視し、「生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力の育成」、「健康の保持増進のための実践力の育成」および「体力の向上」の3つの具体的な目標が相互に密接に関連していることを示すとともに、保健体育科の重要な目標であることを明確にした。学習指導要領解説編によれば、ダンスは心身を解き放して、リズムやイメージの世界に没入して踊ることが楽しい運動であり、仲間と交流して踊ったり発表し合ったりする楽しさや喜びを味わうことができる運動であり、自己の能力に応じた課題を選び、自ら考え工夫するとともに、誰とでも協力して課題を解決できるようにすることが大切とされている。ダンスは、競技として成立し、運動技能そのものを高めていくことを目標とする他の運動領域とは異なる特徴を持ち、体育の中でも「心と体の一体化」や「課題解決・主体的学習」などのねらいを実現するのに適した運動領域だと考えられている。ダンスの果たすべき役割が見直され、これからの体育科教育の重要な部分を担うと期待されるダンス領域の学習内容を考える意義は大きいといえる。

そこで、本研究では、より良い授業をめざして、高等学校におけるダンス授業実施の現状と課題を明らかにし、教員の指導歴の差によらずに展開できる授業や指導法を学ぶための研修について考察するものである。

II 研究の目標

高等学校のダンス授業における、各学校、各教員の現状と課題あるいは要望を把握する。その中で、一例として「現代的なリズムのダンス」を取り上げ、授業の手がかりとなる教材や指導法を学ぶためには、どのような研修内容が望ましいかを考える。特に、指導経験の少ない男性教員も積極的に取り組める内容を導き出すことを目的とする。

III 研究の実際とその考察

1 表現運動・ダンス領域の内容構成とねらい

現行学習指導要領における表現運動・ダンス領域の内容（種目）については、社会におけるダンスの広がりに対応して、従前の「表現・創作ダンス」「フォークダンス」に「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」を新たに加えた3つで構成され、小学校から中学・高校への発達に対応したつながりと発展性をもつようにしているとされる（村田芳子，2007）。

では、そのつながりと発展とはどのようなものか。学習指導要領解説編に沿ってみていくと、まず、小学校低学年では「表現リズム遊び」を内容として、身近な動物や乗り物などの様子や特徴をまねたり、そのものになりきって楽しく踊る「表現遊び」と、軽快なリズムの音楽に乗って全身で弾んで踊ったり、友達と楽

しく自由に踊る「リズム遊び」を組み合わせた遊びの体験ができるようにする。続いて、中学年では、児童の関心や能力にふさわしい題材と活動を取り上げた「表現」と、ロックやサンバなどのリズムの音楽に乗って全身で弾んで踊ったり、友達と自由にかかわり合って楽しく踊る「リズムダンス」を主な内容として、多様な動きを即興的に踊る体験を大切に学習へと進み、さらに、高学年では、変化と起伏をつけたり簡単な群（集団）の動きを工夫する自由な「表現」に加え、「フォークダンス」を通して地域や世界の文化に触れる体験をさせていく。

中学・高校では、表したいイメージやテーマを全身の動きで自由に表現して踊る「創作ダンス」、伝承された踊りを身につけてみんなで一緒に踊る「フォークダンス」、そして、現代的なリズムにのって自由に相手と対応して踊ったり、まとまりのある動きを工夫して踊ったりする「現代的なリズムのダンス」の3つを内容として、それぞれの発達の時期に意味のある体験となるようにし、特に高校においては生徒がさらに深めていきたい内容を選択して、自主的に学習を進めていく選択制の授業へと発展させていくものである。

このような小・中・高校の発達段階を村田は4年のくくりで捉え、表現運動・ダンスのねらいを次のようにまとめている。

小学校低・中学年では、「いろいろなリズムや身体表現の遊び体験を通して、身体感覚やコミュニケーションの基礎を身に付け、踊ることが好きになる段階」、小学校高学年、中学1・2年では、「いろいろなダンスの体験を通してそれぞれのダンスの特性（楽しさや魅力）に触れる段階」、中学3年・高校では「好きなダンスを選び、時・場所・仲間に応じてダンスを再構成・創造してダンスを深める段階」である（村田芳子、2007）。

では、中学3年までダンスの授業を通して得た様々な体験を、高等学校の授業でどのように深めているのか。指導者の意識調査を通して明らかにした。

2 ダンスの授業に関するアンケート

(1) アンケート調査の概要

- ア 調査対象 県内県立高等学校87校の保健体育科教員（含講師）
- イ 方法 青森県総合学校教育センターWebページからダウンロードし、電子メールに添付して回答
- ウ 調査期間 平成19年10月15日～11月6日
- エ 回収結果 65校196名
- オ 調査項目 表1のとおり

表1 調査項目

回答対象	項目
全員	<回答者の特性> 1 性別 2 年齢 3 ダンス指導歴
指導歴のある教員	<ダンス授業の実態調査> 4 取り扱いの内容 5 4の内容について「発表会」や「交流会」実施の有無 6 指導時の自身による教示の有無 7 指導上参考にしている教材について 8 指導上の悩みや問題点
指導歴のない教員	<ダンス授業に対する教員の意識調査> 9 非実施の理由 10 今後授業をやることになった場合の不安や戸惑い 11 種目採択意向とその理由
全員	12 ダンス担当教員の性別 13 指導を行う上で具体的に必要なもの（要望）

(2) アンケート調査の実施結果と考察

ア 回答者の特性（表2）

回答者の特性は表2のとおりである。

項目1の性別では「男性教員」の占める割合が圧倒的に多く、82.7%であった。なお、女性教員の配置校は県立高等学校87校中32校となっている。（2007年4月1日現在）

また、項目2の年齢は「50代」が39.3%と最も多く、「40代」・「50代」で全体のほぼ6割を占めている。

項目3のダンス指導歴については「①ほぼ毎年」の44人（22.4%）と「②以前にやったことがある」の70人（35.7%）を合わせた114人（58.1%）は、指導歴のある教員として調査項目4～7について回答してもらうようにした（表3）。

また、「③経験なし・今後予定なし」の66人（33.7%）と「④経験なし・今後予定あり」の16人（8.2%）を合わせた82人（41.9%）は、指導歴のない教員として調査項目8～11について回答してもらうようにした（表4）。

項目12～13については196人全員に回答してもらうようにした（表5）。

表2 回答者の特性（全回答者=196人）

特 性	回答者	%	
1 性別	男性	162	82.7
	女性	34	17.3
2 年齢	20代	13	6.6
	30代	63	32.1
	40代	43	21.9
	50代	77	39.3
3 ダンス指導歴	①ほぼ毎年	44	22.4
	②以前にやったことがある	70	35.7
	③経験なし・今後予定なし	66	33.7
	④経験なし・後は予定あり	16	8.2

イ 指導歴のある教員のダンス授業の実態（表3）

指導歴のある教員のダンス授業の実態は表3のとおりである。

項目4の取り扱いの内容では「①創作ダンス」が57.9%、「③現代的なリズムのダンス」が45.6%と多く、次いで「④その他」の38.6%となっている。「④その他」としては、特に実施率が高いと思われる「地域・学校の伝統舞踊」について取り上げた。本来であれば、この内容は「②のフォークダンス」に含まれるものだが、今回はその実態を把握するために、あえて分離して取り上げた。その内容として、三高音頭・大間高校音頭・八高音頭・川高ヨサコイソーランなどの学校独自の伝統舞踊、鯨ヶ沢甚句・立俣武多踊り・浪岡小唄・ねぶたかっぱれ・嘉瀬の奴踊り・黒石よされ・木造小唄・わっぱ踊り・金木奴踊り・手踊り民謡などの地域に伝承されている踊りなどがあげられ、地域に根ざした教育の一端をダンスの授業で担っている面もうかがえた。

項目5の「発表会」・「交流会」の有無については79.8%の教員が実施しているとの結果を得た。他領域にはない、仲間と交流して踊ったり発表し合ったりする楽しさや喜びを味わうことができるダンスにおいて、技能、態度、学び方の内容それぞれに明記されているように、「発表会」や「交流会」を持つことの重要性和意義が理解され、広く実践されていると考えられる。なお、実施していない理由としては、時間配分が悪く、最後のまとめができなかったことや、生徒のグループ内での人間関係の問題から、やむをえず実施できなかったなどがあげられた。

項目7の指導上参考になっている教材については教材用のビデオ・DVDが普及していない、あるいは

表3 指導歴のある教員のダンス授業の実態

（全回答者=114人）

項 目	回答者	%	
4 取り扱いの内容(複数回答可)	①創作ダンス	66	57.9
	②フォークダンス	12	10.5
	③現代的なリズムのダンス	52	45.6
	④その他：地域学校の伝統舞踊	44	38.6
5 「発表会」・「交流会」の有無	①実施している	91	79.8
	②実施していない	23	20.2
6 自身による教示の有無	①している	82	71.9
	②していない	32	28.1
7 指導上参考になっている教材(複数回答可)	①教材用のダンスビデオ・DVD	35	30.7
	②一般のダンスビデオ・DVD	60	52.6
	③指導書(主に単元計画)	19	16.7
	④指導書(主に動きの図示)	26	20.2
	⑤ダンス教室に通う	1	0.8
	⑥体育教員同士のアドバイス	60	52.6
	⑦その他	23	20.2
8 指導上の悩みや問題点			

最新のものが入らないこともあり、「一般のダンスビデオ・DVD」と「体育教員同士のアドバイス」が共に52.6%と半数以上を占めた。どのように授業を展開していけば良いのか、その内容等については、やはり一番身近にいる教員同士の経験から学ぶことが多かった。

また、「⑦その他」として以下があげられた。

- ・地区の民謡保存会による指導
- ・過去の授業や発表会のビデオ
- ・生徒が選んできた市販のビデオ
- ・研修会で学んだ内容に手を加えたもの

項目8の指導上の悩みや問題点については35名の教員から回答があった。その内容を以下の①～⑤の5つに分類した。

①指導者側の問題

- ・「創作ダンス」から「現代的なリズムのダンス」を好む生徒が多くなる中で、その内容に指導者自身が初めてのことで理解できないでいる。
- ・指導歴が浅いため、部分的な動きはできても一連の流れを作れないなど、教材研究の時点でつまづいている。
- ・生徒のモチベーションを引き出すのがうまくできず、ダメだとわかっているにもかかわらず取り上げることに躊躇してしまう。
- ・男性教員が創作ダンスの指導をするのは非常に厳しい。積極的に取り組む環境を作ってあげることが難しい上に、生徒の前で動くことも恥ずかしい。
- ・自分自身がダンスの指導を受けた経験が少ないので、生徒に見本を見せたり、動きのアドバイスができない。頭ではイメージできていても、それを体で表現することが難しく、常にもどかしく感じている。
- ・全く経験がないので、生徒に指示してやらせているだけで評価方法も自信がない。
- ・継続的な自己研修がなされず、常に単発の指導で終わっているため、力不足を実感している。
- ・「現代的なリズムのダンス」を扱いたいのだが、どのような動きが内容として良いのかわからないのでやれない状況である。

②生徒側の問題

- ・中学での経験がないこともあり、音楽に合わせての動きづくりや基本ステップを指導すると、周囲を気にして恥ずかしがる生徒、動きたがらない生徒が多い。
- ・映像の真似ばかりして、オリジナルの動きを考える生徒が年々減り、指導上悩んでいる。
- ・生徒間の取組の温度差が激しいため、活動に大きな差が出る上に、発表会をやりたがらないグループが多い。
- ・人間関係が複雑で班編制が非常に難しい。

③授業内容の問題

- ・自由創作の場合、市販されているDVDの真似なのかオリジナルなのか判別できない。
- ・社交ダンスを指導する際、パートナー役がいると生徒の理解も早いのだが、一人だと指導が難しくスムーズに進まない。
- ・「現代的なリズムのダンス」の発表でほとんどのグループが上肢だけを動かす「パラパラ」をやることになってしまい、本来のダンスの目標から大きくずれてしまった。
- ・当初は「創作ダンス」として始まった運動会用のダンスが、マスゲーム的な要素の強いものであったため、徐々に組体操系に変化してしまった。

④カリキュラム・設備上等の問題

- ・女性教諭と一緒に授業は大変勉強になるためT・Tを希望したが、時間割上実現できず、非常に残念だった。
- ・男女共修についての情報がなく、依然として男子は運動会用のフォークダンスにとどまっている。
- ・授業を充実させるためのビデオカメラやプロジェクターなどの機材が足りない。

⑤その他

- ・小規模校であっても男女別で授業ができるような教員配置をお願いしたい。
- ・ダンス授業の充実を図るためにも、女子生徒が在籍している学校には女性教員が絶対に必要である。
- ・他校の発表会や授業の様子を知る機会がほしい。

・ダンス担当は女性教員に頑張ってもらいたいと強く感じたこともあったが、そのようなことを言っていられない時代がきたと思う。男性教員のためのダンス指導の研修を希望している。

以上是指導歴のある教員の抱える指導上の悩みや問題点であるが、やはり指導者側に関する問題点が多かった。中でも毎年指導に携わっている女性教員でさえも、平成10年の改訂で導入された「現代的なリズムのダンス」には戸惑いを感じているようである。その原因として「現代的なリズムのダンス」という分類は非常に曖昧で、捉え方によっては各校・各指導者によるズレが生じる可能性がある点があげられるのではないだろうか。実技経験や指導経験の不足に加えその曖昧さも手伝い、戸惑いや不安がさらに大きくなると思われる。しかしながら、その不安をよそに音楽ほどではないにしろ、他のダンス内容に比べ次々に新しい踊りのジャンルが加わっていく可能性が考えられる種目である。ヒップホップ、ニュージャック、ストリート系フリースタイル、ブレイキング、ジャズダンス、ハウス、ソウル（R&B）、パンキング等が高校生が呼ぶ「現代的なリズムのダンス」であるが、その時代性に教師が目を向けていくことが求められている。また、生徒のほうが教師よりも「現代的なリズムのダンス」については音楽や踊り方に関する知識や技術などの、多くの情報を持っている場合も十分考えられる。従前のダンス指導とは異なり、生徒側からの情報を収集することも大切な役割となってくるのではないかと。

また、中学校段階でダンスの学習内容に学校格差が生じると、おのずとダンスの学習経験の個人差につながっていくため、高校における生徒の取組にばらつきが表れるのも当然の結果と考えられる。

ウ 指導歴のない教員のダンス授業の意識について（表4）

指導歴のない教員のダンス授業の意識は表4のとおりである。

項目9の非実施の理由として「①他に指導する女性教員がいた」の72.0%が最も多く、次いで「③ダンスを実施していなかった」の24.4%であった。やはりダンス担当は女性教員に任せられている現状がうかがえる。「④指導できないので断った」は4.9%とごく少数ではあるが、これもダンスという領域ならではの理由と考える。他領域の指導に関して「指導できないので断る」ということはほとんど考えられず、様々な指導書や教材を駆使しながら本人の得手不得手にかかわらず、指導に取り組んだ経験があるのではないだろうか。裏を返せば、誰もが見て理解できたり、指導できる指導書や教材が普及していない、また指導書などでは理解しづらい領域と言えるのではないかと。

項目10の今後授業をやることになった場合の不安や戸惑いについては「①何をどうすればよいのか、授業の流れについて全くイメージできない」が70.7%を占めた。これは「②自分にダンスの授業を受けた経験がない」の58.5%に表れているとおり、授業を受けた経験の有無がその後の指導者に及ぼす影響が大きいことを意味している。このことが選択肢の③～⑦を不安要素と感じる原因になっているのではないかと。「⑧異性の生徒への指導」の選択肢は男女共修の場合を想定したものだったが、それ以前にダンス授業そのものへの指導者側の課題が山積していることもあり、7.3%にとどまっている。

「⑨その他」としては以下の記述があった。

・生徒の活動が活発になるような声かけなどが思い浮かばない。

表4 指導歴のない教員のダンス授業の意識

（全回答者＝82人）

項目	回答者	%
9 非実施の理由（複数回答可）		
①他に指導する女性教員がいた	59	72.0
②他に指導する男性教員がいた	8	10.0
③ダンスを実施していなかった	20	24.4
④指導できないので断った	4	4.9
10 今後授業をやることになった場合の不安や戸惑いについて（複数回答可）		
①何をどうすればよいのか、授業の流れについて全くイメージできない	58	70.7
②自分にダンスの授業を受けた経験がない	48	58.5
③ダンス用語がわからない	33	40.2
④自分が動けない	33	40.2
⑤評価方法がわからない	22	26.8
⑥人前で踊ることに抵抗がある	16	19.5
⑦曲の選択や指導内容等、教材研究の方法がわからない	16	19.5
⑧異性の生徒への指導	6	7.3
⑨その他		
11 今後の種目採択意向とその理由		
①創作ダンス	17	20.7
②フォークダンス	11	13.4
③現代的なリズムのダンス	32	39.0
④地域・学校の伝統舞踊	22	26.8

- ・ダンスの目標が達成されるような生徒の姿がイメージできない。
- ・女性でありながらダンスの指導をしたことがないため、次の勤務校のことを考えると不安だ。

この他に20代男性教師から「この先いずれ自分もダンスの授業をやる日が来ると思っている。是非、具体的な授業事例や取組の方向性を学ぶ機会を設けてほしい」と前述の項目8の指導上の悩みや問題点についての記述同様の意見があった。何とかして指導ができるようになりたいという前向きな、そして切実な思いが感じ取れる。

項目11では、もし自分が指導するならば、という設定で今後の種目採択意向とその理由を回答してもらった。種目採択意向は多い順に「③現代的なリズムのダンス」の39%、「④地域・学校の伝統舞踊」の26.8%、「①創作ダンス」の20.7%、「②フォークダンス」の13.4%となっている。しかし、この種目採択意向の主体は誰であるかという観点でみていくと、指導の可否を問わず、生徒主体か指導者主体かの観点によって分かれたとも言える。以下はそれぞれの種目採択の理由である。

①創作ダンス

- ・生徒が興味を持っており、実態にも合っているから。
- ・生徒の自主性を生かして授業を進めることができ、真似ではなく、オリジナルの作品を作ることができ、グループでも取り組みやすいから。
- ・自身での見本ができないので、生徒の試行錯誤の中で生まれたものを大切にしたいと考えたから。
- ・感情を体で表現でき、心と体の一体化を最も学ぶことができるから。
- ・選曲・振り付けに制約がなく、生徒の興味を高めることができるから。
- ・できる、できないの差が表れにくく、生徒の能力に応じ自由に創作できるから。
- ・一度研修を受けたことがあるので、イメージできるから。
- ・何人かの教員の創作ダンス授業を見てきたので、授業のイメージがしやすく、他のどの内容よりも自分に指導できる可能性が高いと感じたから。

②フォークダンス

- ・今の世代に残しておきたいから。
- ・他の内容に比べて指導の糸口がつかみやすいと感じるから。
- ・男女共修が最もスムーズにいきそうだから。
- ・指導経験があるから。
- ・小・中学校でやっている生徒が多く、取り組みやすいから。

③現代的なリズムのダンス

- ・近年では生徒の興味・関心も現代的なリズムのダンスに向いており、イメージしやすく取り組みやすいと思うから。
- ・生徒が日頃から目にしているダンスは抵抗なく、積極的に取り組めそうだから。
- ・曲の選択もジャンルが広く、自由度が高いのでグループの特色が出せるから。
- ・男女関係なく、今の時代に適した内容だから。
- ・研修でやったヒップホップが自分自身初めてでも楽しんでできたので、生徒にもやらせてみたいと思ったから。
- ・研修のヒップホップの内容が授業用に構成されていたので、生かせそうだから。
- ・練習すれば自分でもできそうな動きだから。

④地域・学校の伝統舞踊

- ・教員も生徒も男女共修の形で取り組みやすいから。
- ・近年のヨサコイソーランのブームに便乗して中学校から取り組む学校も多いので、高校でも継続し、さらに発展させた内容でやってみたいから。
- ・地域の伝統芸能に触れられる機会であるし、講師を招くことにより集中授業の形で展開でき、自分自身も勉強になるから。
- ・地域や学校の伝統舞踊に取り組むことは伝統の継承はもちろんのこと、特色ある学校づくりにもつながっていくと思うから。
- ・教員が変わっても、継続して指導しやすいから。

以上が主な理由としてあげられた。指導歴のある教員の種目採択は高い方から、「創作ダンス」、「現代的なリズムのダンス」、「地域・学校の伝統舞踊」、「フォークダンス」となっていたのに対し、指導歴のない教員が今後取り組みたい種目としてあげたのは、「現代的なリズムのダンス」、「地域・学

校の伝統舞踊」, 「創作ダンス」, 「フォークダンス」の順であった。特にこれから授業をやる教員にとって「生徒の興味・関心の有無」「時代の流れに合致」「楽しさ」というのは種目採択の重要な要因であり、実技経験の不足という不安要素を抱えながらも「現代的なリズムのダンス」に取り組みたい、取り組んでみたいという結果になったのではないだろうか。残念ながら各種目における「生徒の興味・関心の有無」と「指導のしやすさ」は比例せず、種目採択の支持を得ながらも、その一方で明らかな教員の実技経験や指導経験の不足が指導に対する不安をもたらし、採択を回避する悪循環がおこっていると考える。この部分のズレを解消することによって、生徒と教員両者にとって望ましい授業が展開されるのではないか。そのためにも教員の誰もが自信を持って指導できるような指導方法・指導内容の確立が必要と思われる。

エ 全員への質問 (表5)

全員への質問は表5のとおりである。

表5 全員への質問 (全回答者=196人)

項目12では性別、年齢、指導歴にかかわらず、ダンス担当教員の性別について質問した。前述のとおり、指導に関して各教員が様々な課題を抱えていることを前提にしたうえで、あえてこの質問をおこなった。ここでは単純に体育教員が授業の領域としての「ダンス」を指導するという観点に立ち、多くの教員がどのように捉えるのかということを知りたかった。そのため①について、「専門外であっても」という文言を加えた。回答は「①専門外であっても女性が望ましい」が33.7%、「②男性」が0.0%、「③どちらも担当できるようになるべき」が66.3%であった。女性が望ましいとした回答では「ダンス分野の特性を考えると男性より女性の方がよいのではないか」という意見が多かった。やはり他領域とは性質を異とするダンス領域の指導の難しさはどうしても拭いきれないといえる。しかしながら、男性・女性の別なしにダンスの指導ができることが望ましいと考える教員66.3%という数字は「指導できるようになりたい」という教員の希望や意欲の表れであり、ますます今後のダンス指導において具体的な提案を進めていく必要性を感じる。

項目	回答者	%
12 ダンス担当教員は		
①専門外であっても女性が望ましい	66	33.7
②男性	0	0.0
③どちらも担当できるようになるべき	130	66.3
13 指導を行う上で具体的に必要なもの (自由記述)		

最後に項目13として、教員がダンスの指導ができるようになるために必要としているものは何かを知るために「指導を行う上で具体的に必要なもの」を回答してもらった。

- ・指導の参考になる動きや構成づくりの教材、たとえば「創作ダンス授業展開マニュアル」のようなもの。
 - ・初心者への指導として使える簡単でわかりやすい指導法のビデオ・DVD。
 - ・基本ステップや単純でなじみやすい動きのフレーズの入った教材用ビデオ・DVD。
 - ・創作させる前の取りかかりとして、みんなで踊れるような簡単な練習用の「現代的なリズムのダンス」の振り付け映像や資料、その音楽のCDがあれば、県内の学校において誰でもダンスの授業に取り組みやすくなると思う。
 - ・ヒップ・ホップを教えたいと思っているが、ダンスの習得には実技研修会が絶対に必要である。
 - ・自分で指導できるようになるためにも長期的・継続的な研修会を開催してほしい。
 - ・「現代的なリズムのダンス」の基本の動きの習得と、授業の展開の仕方を学ぶための研修会の開催。
 - ・県内に「ダンス」の授業を浸透させるためにも、指導のできる教員を各校で派遣し合ったりできないものか。実際の授業を見ることで自分も勉強できるので、生徒・教員双方に効果があると思う。
- 以上が主な要望であるが、そのほとんどが「教材 (視聴覚教材)」, 「実技研修会」に分けられる。いずれも「実際に見て動く」という学び方を要望していると言える。

実技経験のない教員にとって多くの指導書やダンスの著書にある動きの説明は、映像があっただけでことばと動きが一致し、理解し、つながりを実感できるものになるが、ことばや図・写真だけで動きをイメージして動くことは、非常に困難な作業になると思われる。あくまでも動きを説明することばであって、そのことば通りに動けば「踊れるようになる」ものではないということも多く教員が実感するからこそ、「生の学び」を望むのではないだろうか。

3 「生の学び」を体験する実技・指導法研修をめざして

1例として県内の研修会参加者をみると、「平成18年度青森県高等学校教育研究会（保健体育部会）」における「実技伝達研修（柔道・テニス・ダンス）」では、ダンス分科会参加教員39名中、男性教員が17名を占めた。この研修会は筆者自身が平成18年5月に山梨県甲府市にて開催された「子どもの体力低下・運動嫌い防止のための指導者の養成を目的とした研修（東部地区学校体育指導者中央講習会）」（独立行政法人教員研修センター主催）に参加し、その伝達研修として講師を務めたものである。男性教員は20代・30代がほとんどであったが、50代も数名おり、全員が実技経験・指導経験が皆無に等しいとのことであった。3泊4日の中央講習会は、幅広く豊富な内容であったが、伝達研修会は時間的制約もあり、参加者から要望の多かった「現代的なリズムのダンス」に絞って行った。

そこで、研修を行うにあたり「何を伝え、何を感じさせたいか」を考えることとした。前述のとおり、小学校からつながりと発展性を持って展開されてきたダンス領域であるが、指導者である多くの教員自身にその「学びの体験がない」という現状を念頭に置くことが重要と考える。「学びの体験がない」ということは、ダンスを通して「心身を解き放して、リズムやイメージの世界に没入して踊る」経験がなく、「仲間と交流して踊ったり発表し合ったりする楽しさや喜びを味わう」機会に触れていないとも言え換えることができるのではないかと考える。だからこそ、研修会では指導法云々よりも、まず教員自身がダンスに向き合い、楽しみ、汗を流すという体験をすること、そして机上の教材研究では味わえないダンスの魅力を、体を通して実感してもらうことに尽きると感じた。

具体的に「リズムに乗れるかな」、「恥ずかしさの見え隠れする自分」、「自分の体ってこんな動きをするんだ」、「心臓どきどき」、「息ハアハア」、「あんな風に動きたい」、「もっと動けるかも」、「体がほぐれてきたな」、「疲れるけど気持ちいい」、「仲間がいるから楽しい」、「自分にもできるんだ」等、様々な体と心を感じるような、そして他者を感じることでできる「生の学び」を提供し、中村の提唱する「自分の体の主体者になる」経験の場であることが望ましいのではないかと考える（中村なおみ、2008）。

(1) 実技研修「ヒップホップってこんな感じ!!」の展開例

以上を踏まえ、これまでの講習会の内容と、今回のアンケート調査の結果をもとに「現代的なリズムのダンス」を取り上げ、「ヒップホップってこんな感じ!!」というテーマで実技研修の展開例を作成することとした。「現代的なリズムのダンスの単元計画」における1時間の学習の流れの原則は、毎時間ダンスの特性（踊る、創る、見る）に触れるように進めることであると述べている（牛山真貴子・薬師寺貴花、2001）。この原則に基づき、研修内容の組み立てを行いたいと考える。

また、「ダンス」という領域で生徒が何を学び、何を感じるのか、そして指導者が何を育てたいのか、ということが見えてくれば学習の道すじも理解しやすくなるのではないかと考え、ダンス学習のキーワードを図に示した（図1）。参加した教員が、このキーワードを「心と体」で感じることができ、ためらいや羞恥心からの解放を実感できる研修をめざしたいと考える。

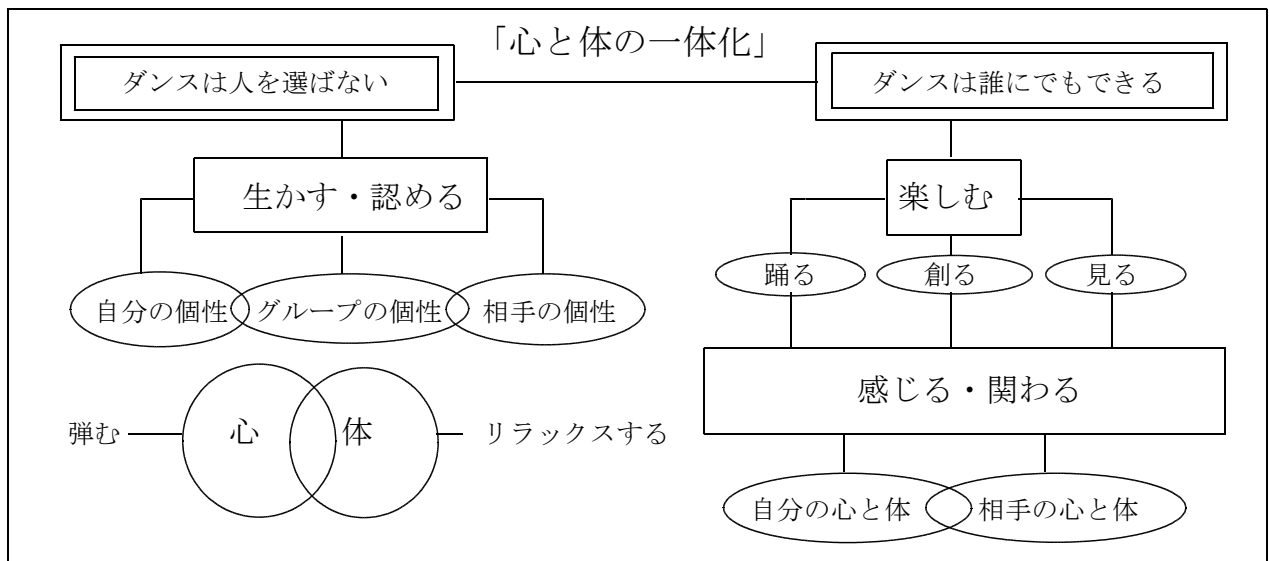


図1 「ダンス」学習のキーワード

なお、実技研修は年齢、性別を問わず、特に実技経験・指導経験の少ない教員を対象として考えてみたが、実際に活動する時間をおよそ200分と設定し、参加人数・活動の状況・休息时间・内容の変更等により、大きく変わっていくことも考え作成したものである(表6)。

また、展開例は「流れ(テーマ)・内容」および「支援(ことばがけ)など」の項目を設け、曲の種類や長さ、テンポ・リズム、場の設定や工夫、注意すべき点等に加え、具体的なことばがけについても、内容に対応する形で記すこととした。

表6 研修事例「ヒップホップってこんな感じ!!」

時間	流れ(テーマ)・内容	支援(ことばがけ)など
30分	<p>①体をほぐし全身でリズムに乗ろう</p> <p>「クラップ(手拍子)でリズムを感じよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リズムを変えて(8カウントずつ) ・たたく部分を体のいろいろな部位に広げて ・足踏みを加えて ・自由に歩き回って出会った人とハイタッチ ・スキップをしながら <p>「全身を使って動こう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ランニング ・足ジャンケン ・その場両足跳び ・左右跳び ・ケンケンパー ・サイドステップ <p>覚えやすいものを組み合わせて繰り返す(途中で休息できるパートを入れる)</p> <p>(出す足の方向を変えいく)</p>	<p>○リズムのはっきりした曲を選ぶ(レゲエ, ヒップホップ, ラップなど)</p> <p>「おへそでリズムをとって」</p> <p>「力強く足の裏を床に置くように」</p> <p>○運動量が徐々に多くなるように空間を広げていくよう促す</p> <p>○テンポの速い曲を選ぶ(ユーロビート, サンバなど)</p> <p>○たっぷりの運動量を確保</p> <p>「休まずにどンドン行くよ」</p> <p>「休むときはウォーキングでね」</p> <p>「上体の力を抜いて」</p> <p>○大きな動きにつながるように</p> <p>「腕の動きもつけてみようか」</p>
	<p>「up-downのリズムをつかもう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・脚を曲げて足の裏と裏を合わせて 8カウントずつ「上に伸びて」「ちぢむ」 4カウントずつ「上に伸びて」「ちぢむ」 2カウントずつ「上に伸びて」「ちぢむ」 1で「上に伸びて」2で「ちぢむ」 ・「茶摘」を歌いながら手合わせしよう 速いテンポで座ったまま ↓(軽快に) 少しゆっくりのテンポで座ったまま ↓(腕の動きを感じながら) もっとゆっくりのテンポで立ち膝で ↓(体でリズムを取りながら) 肩幅に脚を開いて立って ↓(down-upのリズムを組み立てる) ウォーキングしながら相手を変えて 	<p>○二人組で向かい合って座る</p> <p>「ゆっくりおおきな呼吸をしてね」</p> <p>「相手を感じながら」</p> <p>「ガクンと力を抜いてみて」</p> <p>「おへそに向かって縮んでみよう」</p> <p>「アップ, ダウン, アップ, ダウン」</p> <p>○たてのりのリズムへと自然につながっていくようにリズム変化をつけながら</p> <p>「夏も近づく八十八夜・・・」</p> <p>「みんなで歌いながらね」</p> <p>○自分の体の前でたたく手拍子にアクセントをつけて強調させていく</p> <p>「手拍子の時にストンと自分のおなかに落とすようにたたいてみて」</p> <p>「ダウンの時に膝で体重を受け止めて」</p> <p>「上体もリラックスさせて相手の手をポーンと弾くように」</p>
(30分)	<p>②フレーズを覚えて踊ってみよう</p> <p>「ニューテクニックをゲットしよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やさしいステップ系の基本動作をやろう a. 膝の屈伸でバウンド b. オープンスタンスで足踏み c. ウォーキング d. サイドステップ e. サイドタッチステップ 	<p>○リズムのはっきりした曲を選ぶ</p> <p>○丁寧に見本を見せながら</p> <p>「力抜くよ。リズムをとって」</p> <p>「体重の移動感じてる?」</p> <p>「かっこよく歩いてみようか」</p> <p>「さっきやったよ。大きく動こう」</p> <p>「ワン, ツー, スリー, アンドフォー。アンドですばやくももをぐっと胸に引き寄せて上げるよ」</p>

<p>60分</p>	<p>f. クロスステップ g. キック</p> <p>h. ジャンプ・ツイスト</p> <p>・やさしいフロア系の基本動作をやろう 伸びる, 縮む, 床に手をつく (片手, 両手), 中腰, 膝立ち, 足の振り上げ, 床に腰をおろす, 腰を浮かす, など</p> <p>・応用動作に挑戦しよう ステップ系・フロア系を組み合わせ</p> <p>・フリーに練習しよう ひとりで, 近くの人と即興グループで</p>	<p>「一步を大きくおおげさに」 「ぐっとおなかに力入れて。パンチの足バージョンだよ, おもいきり」</p> <p>○速いリズムの動きなので, カウントを意識させてキレイく</p> <p>○短く, 覚えやすい長さにする (16カウント : 8カウント×2 から32カウント : 8カウント×4まで)</p> <p>○ポイントとなる場所意識できるように, ひとつずつの動きを大きくはっきりと見せる</p> <p>○ワンフレーズの長さは, 基本動作同様に16カウントから32カウントにする</p> <p>○全体あるいは個別のつまずきを観察してフィードバックする</p>
<p>(90分)</p>	<p>「オリジナルダンスをみんなで踊ろう」</p> <p>・ステップ系・フロア系の基本動作を軸に, 応用系に発展させたオリジナルダンスをみんなで覚えよう</p> <p>間違いを恥ずかしがらないで ↓ たくさん汗をかいて ↓ 何度もやってみよう ↓ どんどん聞こう</p>	<p>使用曲 (例)</p> <p>「Big Boy」DULFER (4' 46", ♩ =96) (リズムをしっかりと感じとれる曲)</p> <p>○指導者が64カウント (8カウント×8) のオリジナルダンスを作る</p> <p>○動きにことばをつけることで覚えやすくなるので工夫して (例: キックとんとん, みぎひだりダブル, サイド起こして回って伏せるなど)</p> <p>○曲はずっと流したまま自由に練習し合える雰囲気をつくる</p> <p>○みんなの中に入って一緒に動いて</p> <p>○全体あるいは個別のつまずきを観察してフィードバックする</p>
<p>20分 (110分)</p>	<p>③互いに見せ合いながら楽しもう 「見ることは気づくこと・感じること」</p> <p>・同じ動きでもみんなそれぞれ個性がある</p> <p>・どんな動き方でもいいんだ</p> <p>・リズムに乗って楽しく動く仲間を見るのが楽しい</p>	<p>○即興グループを作り, 次々に同じ動きをその場で踊っていけるようにテンポ良く指示</p> <p>○正面や並び方などに決まりを設けず, 動きを互いに感じ合えるように 「恥ずかしがらないで。見るほうも盛り上げていこうね」</p> <p>○2～3回くり返す</p>
	<p>④グループで続きを作ってみよう 「動きを工夫してつくってみよう」</p> <p>・新しい動き</p> <p>・移動の工夫</p> <p>・高さや方向の工夫</p> <p>・繰り返しに変化をつけて</p> <p>・ひとりで, みんなで, 人数を変えながら</p> <p>・終わりはポーズ?それとも・・・</p>	<p>○はじめての創作なので32カウントをめざして自由に楽しく取り組めるように</p> <p>○曲はずっと流したまま自由に練習し合える雰囲気をつくる</p> <p>○間違わずに踊れたか否かだけに気持ちが向かわないように, ことばがけをしていく</p>

<p>60分</p> <p>(170分)</p>	<p>「さあ、踊りこもう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・笑顔で ・お互いを感じながら ・リズムに乗って ・自分らしく ・弾けよう ・体が自然に動くようになったかな 	<ul style="list-style-type: none"> ○踊りこむ時間はチームワークを育てる時間。充分確保することをこころがけて ○注意出しはヒントになるアドバイスを「いい感じだよ。いつもの笑顔の3乗でね」「その動きかっこいいね。あと少し歩幅を大きくしたら最高だね」「指先に結んだ糸が引っ張られるようにもっと遠くに伸ばしてみて」「ボールを遠くに蹴るように」「髪の毛も踊らせて」
<p>30分</p> <p>(200分)</p>	<p>⑤「ミニミニ発表会」を開こう</p> <p>「オリジナルダンスとつないだ小作品の完成」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・失敗を恐れずに ・今持っている力で ・おもいっきり ・動こう、楽しもう <p>「今日の研修会を振り返って」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに振り返りの時間をもつ <p>「『お疲れさま』『ありがとう』の握手と拍手で解散」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○1グループずつ発表 ○見る人は手拍子をしながら盛り上げよう ○各作品にそれぞれのグループから感想を出し合う <p>○各グループの話し合いに耳を傾けて</p> <p>「今日ここで、どんなことを感じましたか。心と体で感じたものを持ち帰って伝えて頂けたらと思います」</p>

IV 研究のまとめ

指導者の性別・年齢・経験の有無を問わずに展開できる授業の教材や指導法について研究を進めてきたが、本研究におけるアンケート調査の結果、以下のことがわかった。

ダンス学習において「生徒の興味・関心の有無」「時代の流れに合致」「楽しさ」というのが種目採択の重要な要因であるにもかかわらず、「指導のしやすさ」とはなかなか比例しない。教員の実技経験や指導経験の不足が指導に対する不安をもたらしており、ダンスの教育的価値や効果は認めながらも、採択を回避する悪循環が起こっている現状が明らかになった。しかし、多くの教員は男女の別なしにダンスの指導ができることが望ましいと考えており、「教材（視聴覚教材）」や「実技研修」の機会を積極的に活用し、自己の実技力向上もしくは指導すべき動き方の内容を学びたいという意欲も明らかになった。そのためには「学びの体験がない」教員に、何よりもまず、ダンスの魅力を体験・体感させることが急務であると感じた。私たち体育教員には運動の楽しさや喜び、またそれによって得られる達成感を、自分の体やことばを通して生徒に伝えていくという役割があると考えます。そのため、自分に全く経験のないものを生徒に教えたり、伝えることへの不安を抱くのは当然である。そしてその不安が、教員・生徒両者にダンス学習の機会を失わせている原因になっていることが悔やまれる。

あらためて教材研究や指導法研修の立ち遅れが再確認されたが、教員の誰もがダンスと向き合い、関わる経験を得ることこそ、自信を持って積極的に指導することへとつながり、最終的により良い授業を生み出す力になっていくと考える。

V 本研究における課題

今後の課題は、ダンス授業の実態について、実地踏査や検証授業等を通してさらに詳しい調査を行うとと

もに、生徒を対象とした意識調査を行い、教員・生徒の両者の視点でより良いダンス授業の在り方について考察を行うことである。また、ダンスの未経験者や男性教員にもわかりやすく取り組みやすい視聴覚教材と、長期・継続的な系統性のある「実技・指導法研修」を望む声に応えるための具体的な提案ができるよう、さらに研究を続けていきたい。

<引用文献>

- 文部省（現文部科学省） 1999 「高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編」, P. 9, P. 57～63,
村田芳子 2007 『表現運動・ダンスの学習内容について考える』「体育科教育2007. 5」,
P. 35～39, 大修館書店
中村なおみ 2008 『1 理論 中村なおみ 体の主体者をめざして』「体育科教育2008. 2」,
P. 22～23, 大修館書店
牛山真貴子, 薬師寺貴花 2001 『2 現代的なリズムのダンスの授業』「新学習指導要領による高等学校
体育の授業 下巻」, P. 290, 大修館書店

<参考文献>

- 「新学習指導要領による高等学校体育の授業 下巻」 大修館書店
「体育科教育2005. 10」特集 ダンス・ダンス・ダンス 大修館書店
高橋和子 2004 「からだー気づき学びの人間学ー」 晃洋書房
文部省（現文部科学省） 1999 「小学校学習指導要領解説 体育編」
文部科学省 2004 「中学校学習指導要領（平成10年12月）解説 保健体育編」 平成16年 5月一部補訂